**■小倉金之助　　生涯病気と闘いながら，在野で数学・科学思想の啓蒙に努めて尊敬を集め，民主的な指導者の先駆に。**

おぐらきんのすけ

内閣発足・・1885＝　　山形県飽海郡酒田で，廻漕問屋小倉末吉の長男に生まれる。母は里江。
帝国大学始・1886＝ 1歳：妹倉代が誕生。父が死去し，

帝国憲法発布1889＝ 4歳：母が再婚。
帝国議会始・1890＝ 5歳：酒田尋常高等小学校に入学。
大津事件・・1891＝ 6歳：母が妹をつれて分家したため，祖父金蔵・祖母志賀のもとで養育される。

郡司千島探検1893＝ 8歳：この年，藤巻しまが祖父の養女となる。
日清戦争始・1894＝ 9歳：庄内大地震で家は焼失，学校は倒壊。

白馬会・・・1896＝11歳：翌年にかけ，和島与之助が担任になる。様々な書物に接し始める。病弱のため，海岸の温泉で静養。
八幡製鉄始・1897＝12歳：化学の実験に没頭し，かたわら代数と英語を独習する。
政党内閣初・1898＝13歳：卒業。祖父の留守中，祖母を説きふせ，荘内私立尋常中学校を受験，合格し，入学。
Bushidou・・1899＝14歳：赤痢にかかり療養。祖父が退学届を出すが，
ﾋﾟｱﾉ国産化・1900＝15歳：復学。独立の時間割を作成し，化学・物理学・数学・英語に集中。演説会などで，学校の姿勢を批判。
田中正造直訴1901＝16歳：学校が山形県立荘内中学校となる。
教科書疑獄・1902＝17歳：祖父の許可を得ずに中学を中退，上京して東京物理学校に入学。
日比谷公園・1903＝18歳：かたわら，ドイツ語を学ぶ。気管支カタルを患い一時帰郷。講師桑木或雄の感化を受ける。
日露戦争始・1904＝19歳：私立大成中学校にも入学。講師愛知敬一の講義を聞いて理論物理学に興味を持ち，校内誌に論文を寄稿。
日露戦争終・1905＝20歳：両校を卒業。祖父隠居で家督を相続。池田菊苗の厚意で，東京帝国大学理科大学化学選科へ入学。
満鉄発足・・1906＝21歳：悪性の感冒で病臥。家業の不振もあり，大学を退学して家業につくことを決意。祖父養女と結婚。和島与之助が死去。上京して林鶴一の指導を受け，**_家業のかたわら，数学を研究に専念し始める。**
韓国反日暴動1907＝22歳：長男が誕生。東京数学物理学会に入会。酒田で発行の雑誌{木鐸}に寄稿し始める。
ｱﾌﾗｷﾞ創刊・ 1908＝23歳：学会で処女論文発表，多くの洋書を読んで刺激を受ける。船長と上京，カムチャツカ漁業許可得る。
伊藤博文暗殺1909＝24歳：荷風文学に大いに激励され，商用で新潟に赴いた際，**_家業から手をひき，職業数学者になることを決意。**
韓国併合・・1910＝25歳：東京物理学校講師に就任，微積分を講ずる。本代捻出のため{数学叢書}の「級数概論」を書き始める。
大逆事件判決1911＝26歳：**_新設された東北帝国大学理科大学助手となり，林鶴一が私費で発刊した{東北数学雑誌}編集に従う。**
明治天皇没・1912＝27歳：祖父が死去。***処女作「級数概論」を出版(名義は林鶴一との共著であるが，実質は小倉単独の労作)。**
大正政変・・1913＝28歳：第三臨時教員養成所の講師となり，代数を担当。祖母も酒田を引揚げ，仙台で同居。**_ルーシェとコンブルース「初等幾何学」第一巻の訳書を刊行，沢柳政太郎総長から励まされる。**
第一次大戦始1914＝29歳：祖母の手で酒田の家産の整理が完了。**_サーモン「円錐曲線解析幾何学」訳書刊行。「文部省教員検定試験数学問題の批判及びその改良私見」を書くも掲載誌なし。**
21ヶ条要求・1915＝30歳：**_「初等幾何学」第二巻の訳書刊行。助手のままで"授業嘱託"となる一方，本格的な論文を書き始める。**
民本主義・・1916＝31歳：***論文「保存力の場における径路」により理学博士。**
ﾛｼｱ革命・1917＝32歳：妹倉代が死去。**_招聘されて，塩見理化学研究所研究員に転じ，大阪医科大学教授として講義を開始。**
ﾍﾞﾙｻｲﾕ条約・1919＝34歳：**_フランスに留学，**
大暴落・・・1920＝35歳：ストラスブールで開催の国際数学者大会に，高木貞治と出席。相対性理論の研究を行ない，
原敬首相暗殺1921＝36歳：一部をパリ科学学士院の報告に載せて，
水平社結成・1922＝37歳：**_帰国。系統的な実用数学の講義を始め，諸講習会で講義。来日したアインシュタインの特別講義を聞く。**
関東大震災・1923＝38歳：前年の巡回講習会の**_講義をもとに「図計算及び図表」刊行。**
護憲三派圧勝1924＝39歳：青山師範学校の講習会で小原国芳とはじめて会う。**_「数学教育の根本問題」刊行。**
治安維持法・1925＝40歳：**_塩見理化学研究所長となる。「統計的研究法」刊行し，大原社会問題研究所と縁始まる。病臥始まり，**
円本時代始・1926＝41歳：大阪医科大学教授を辞職。療養生活を送りながら，{数学教育名著叢書}の編集に参加。
金融恐慌・・1927＝42歳：病床にあって，文学書などを読み，トルストイの科学論に感銘。
共産党事件・1928＝43歳：**_共訳で，ザンデン「実用解析学」刊行，続くカジョリ「初等数学史」で数学史に興味。健康ようやく恢復。**
世界恐慌・・1929＝44歳：祖母が死去。三木清・羽仁五郎らと親交。***論文「階級社会の数学」などで，わが国科学思想界の指導者へ。**
海軍軍縮条約1930＝45歳：和算書の収集を始める。就職の相談にきた戸坂潤を知り，
満州事変・・1931＝46歳：病臥後，広島文理科大学で講義。
五一五事件・1932＝47歳：中国数学書の収集始め，前年創設の大阪帝大理学部講師。**_「数学教育史」刊行。唯物論研究会創立に関与。**
帝人疑獄事件1934＝49歳：**_松田源治文相の反動的な数学教育の根本改革の考え方に対し，「数学教育の改造問題」を書いて警告。**
芥川直木賞始1935＝50歳：**_林鶴一が死去。「数学史研究」第一輯刊行。この年，国定教科書「尋常小学算術」(緑表紙)の刊行始まり，**
二二六事件・1936＝51歳：**_「自然科学者の任務」を書き，科学をファシズムから守るため科学者の団結を訴える。**
日中戦争始・1937＝52歳：長男が結婚。**_塩見理化学研究所長を辞任し，東京に移住。「科学的精神と数学教育」刊行。**
健保+総動員 1938＝53歳：**_岩波新書が発刊され，「家計の数学」が配本となる。**
第二次大戦始1939＝54歳：急性肺炎にかかるも快癒。**_ラジオで五日間にわたり「日本の数学」の放送し，**
大政翼賛会・1940＝55歳：**_岩波新書「日本の数学」刊行。東京物理学校理事長および幹事となり，{大政翼賛促進の会}にも加わる。**
日米開戦・・1941＝56歳：結成され日本科学史学会の顧問。翌年にかけ病臥。**_「現時局における科学者の責務」書いて統制主張。**
・・・・・・1942＝57歳：以後，健康がとみに衰え，この年はほとんど活動ができず。
創価学会検挙1943＝58歳：理事長を辞職。幹事も辞任し，物理学校から完全に身を引く。原稿依頼がなくなり，事実上の執筆禁止。
年金+総武装 1944＝59歳：孫連れ，妻と酒田に疎開。**_「戦時下の数学」刊行。**
敗戦・・・・1945＝60歳：酒田も空襲で，袖浦村黒森に疎開。敗戦後，石原莞爾の講話を聞き，母の死去後，東京の自宅に帰る。
新憲法公布・1946＝61歳：胃潰瘍悪化するも回復。「科学の指標」刊行。**_民主主義科学者協会初代会長。日本放送協会会長は固辞。**
新憲法施行・1947＝62歳：急性肺炎2回。日本民主主義文化連盟の常任委員長。「明治数学史の基礎工事」完成。
極東裁判決・1948＝63歳：急性肺炎。「一数学者の記録」刊行。**_日本科学史学会会長。「数学史研究」(第2輯)刊行。**
三大事件・・1949＝64歳：急性肺炎。日本民主主義文化連盟会長を辞任。東京物理学校同窓会初代会長。「数学教育の刷新」刊行。
朝鮮戦争始・1950＝65歳：半年も病臥。民主主義科学者協会会長を辞任。**_2年間の口述筆記による「数学者の回想」刊行。**
独立回復・・1951＝66歳：健康が徐々に恢復し，自筆可能に。遠山啓らの相談で**_結成された数学教育協議会会長に就任。**
TV放送始・・1953＝68歳：再び病臥し，作歌始める。数学教育協議会会長を辞任。「数学の窓から」刊行。**_「われ科学者たるを恥ず」，**
自衛隊発足・1954＝69歳：奇跡的に体調良い年となる。前年から「読書雑記」十数篇を口述し，{図書新聞}に掲載。
**55年体制始・**1955＝70歳：大患，中国科学院視察団訪日の集会に挨拶代行依頼。小倉補訳の改訂「カジョリ初等数学史」上巻刊行，
国連加盟・・1956＝71歳：続いて下巻刊行。「科学史と科学教育」「一数学者の肖像」刊行。「回想の半世紀」を口述筆記。病床につく。**_「近代日本の数学」刊行で毎日出版文化賞。**
なべ底不況・1957＝72歳：再び病臥。共著「現代数学教育史」刊行。「読書と人間」刊行。**_第6回平和文化賞。**
ｲﾝｽﾀﾝﾄﾗｰﾒﾝ・1958＝73歳：過去の業績から抜粋した「数学教育論集」刊行。以後，病臥の状態が続き，
安保闘争・・1960＝75歳：日本科学史学会会長を辞任。前立腺肥大で入院も。

全国総合計画1962＝77歳：***「語りつぐ日本の数学」の口述に力を注ぎ，和算研究の組織である算友会が改称した日本数学史学会の会長に就任したが，胃癌であることが判明し，没した。**

阿部博行「小倉金之助・生涯とその時代」，「没年日本史人物事典」，平凡社百科事典，